

2017 World rowing championships 報告書

愛知県ボート協会所属
国際審判員 田畑喜彦

0. はじめに

9月24日から10月1日まで、米国フロリダ州 Sarasota-Bradenton エリアの Nathan Benderson Park で 69 か国、900 人を超える参加により世界選手権が開催され、審判員として参加させていただく機会をいただきました。参加に当たりご配慮いただきました木村理事長、千田国際委員長はじめ日本ボート協会関係各位に感謝申し上げます。遅くなりましたが審判業務ならびに大会施設・運営等報告させていただきます。

1. 開催場所について

Nathan Benderson Park はフロリダ州の西海岸に位置し、タンパ空港から車で南方へ 1 時間ほどの距離。30 年ほど前に周辺の高速道路建設のための骨材を掘削した跡地を 161.8ha の公園として整備し、その後 FISA の基準に合わせ 8x13.5m のコースに整備された。人工の土堤(大会期間中は TV クルー専用道)に区画されたエリアには 1,500m のウォームアップエリアがある。直前に全米を襲ったハリケーン Irma による被害は、幸いなことに限定的であり、街中には倒木など見られたものの大会は予定通り開催された。



図-1 判定塔からのコースと練習水域、手前は観覧席

2. 設備について

会場は発艇塔、線審塔、判定塔は恒久設備であったが、州政府の財政難との理由から観覧席を含むそれ以外の設備は仮設であり、ボートハウスは一棟もなく、シャワーはコンテナ車を何車も連ねたものが用意されていた。

(ア) 大会本部、判定塔

5 階建ての判定塔は 2F が FISA Family 向けのラウンジとテラスとなっており、テラスも含めたエリアがレース後の昼食会場。審判の昼食は連日レース終了後となるため、最初はクッキー程度しか残っていない状態であったが中盤からは量的には事足りぬことはなかった。また連日ビール、ワインが振る舞われていた。

3F は判定、4F は Press、5F は FISA Office。エレベーターは大きなものが 1 基しかなく常にエレベーター待ちが必要で機動性に欠ける作りと感じた。階段利用がベスト。

(イ) 仮設トイレ、シャワールーム

毎度のことながら、会場到着後、まずは仮設のトイレのチェックに入りました。仮設トイレにはいくつかタイプがありましたが、いずれもエアコン完備です。フロリダの炎天下(大会期間中は華氏表示で 90 超え、連日 35°C 前後)でのトイレは、日本式仮設トイレは苦痛ですがここサラソタでは快適に利用することができました。唯一発艇エリアには日本式仮設トイレが設置されていましたが、現地米国人はこれを指して、「Farmers' Toilets」と言っていました。なるほど？



図-2 判定塔(背面から)

シャワールームも仮設とはいえエアコン完備、使う機会はありませんでしたが快適さがうかがえました。何れも大型のトレーラーを引っ張ってきて設置できる道路事情というのがありますが、2020TOKYO 海の森会場では開催時期を考えるとこのような設備は必須であり、「Farmers' Toilets」を準備した場合の各国選手団の戸惑いと、日本(のトイレ文化)に対する落胆は、日本が誇る、お・も・て・な・しに対する相当大きなダメージになるでしょう。



図-3 トイレ外観



図-4 トイレ内部

(ウ) 発艇塔、線審塔

ともにとても簡素な造りであり、発艇塔には窓、ドア等は一切なく、適度な風が吹き抜けるため、この時期のフロリダでも快適であった。スタートポンツーン、スタートフィンガーには陸上から容易にアクセスでき、操作性も良い。一方、線審塔は屋根が小さいため直射日光が建物内に容赦なく差し込み、意外なことにエアコンもないため暑くて大変なポジションであった。しかし練習水域から線審のすぐ横を各クルーが発艇エリアへ向かうため、クルーのアドバタイジングチェックが容易にできるポジションです。



図-5 発艇塔



図-6 線審塔

(エ) 主審艇

MIT 卒のボート関係者が設計したカタマラン艇はフロートの形状に特徴があり、驚くほど波を立てにくい構造。特筆すべきはカメラクルーの“トリマラン艇”。文字どおり、フロートは3連構造で断面形状は主審艇と同じである(主審艇もトリマラン)。ただし、サイズは一回り大きい。FINAL は15分間隔で1台のカメラクルーがコース内を走りまわることが、驚くほど波が立たない。スピードに応じ船の傾斜も変わるのがミソとのこと。設計は“STILL WATER”。



図-7 トリマラン(左がカメラクルー用、一回り大きい)

(オ) 艇計量、選手計量所

簡単なテント内に設けられた計量所ですが、機器を据え付ける場所は水平にコンクリートが打設されており、計器の沈み込みや傾斜はない。この大会に合わせて計量所をレイアウトし、直前にコンクリートを打設したとのことだったが、公平性が担保された施設です。日本では河川敷内であれば河川管理者の許可が必要となるが全日本ジュニアでの計量等の参考になるのではないかと感じました。(選手計量所内にも計量機器はコンクリートの上に置かれていた)

(カ) 出艇・帰艇棧橋

出艇、帰艇ともに2基、それとは別にパラロウイング専用1基あった。パラロウイング用の棧橋へのアプローチ路は芝生の中にカーペットを敷いたようなものだったが、車椅子の選手にはちょっとしんどいなと感じた。

3. 運営について

(ア) NTO

米国の国際審判員は現在 25 名とのことだが、ITO の 1 名、FISA Umpiring Commission メンバーの 1 名を除く全メンバーが参加しているのでは?と思わせるくらい各所に NTO として FISA Umpire が配置され ITO とのパイプ役となっていた。

特に監視部署には少なくとも 4 名の FISA Umpire が配置されており、そのうちの一人 Tiffany は昨年のロツテルダムの世界選手権に研修を兼ねてボランティアとして参加、その後に国際審判員の資格を取得して今大会に参加していた。

当然、National Umpire も多く参加しているが米国のルールは FISA Rule であることから習熟しており、よくトレーニングされている。特に繁忙を極めるのは監視であり、連日固定された NTO とボランティアのチームワークは見事であった。

(イ) ボランティア

大会組織委員会のホームページ(<http://wrch2017.com/volunteers/>)により募集されたボランティアは、高校生からリタイアした元軍人まで様々であり、彼らは交通費、宿泊費は自己負担で参加しているとのことであった。開催期間延べボランティアは 2,000 名とのことであったが、食事(おそらく 3 食?)は組織委員会が負担するとはいえ、ボランティア精神が根付いた国では見返りはおろか相当の支出も厭わない精神を持つ彼らはおそらく TOKYO2020 に大きな戦力として期待できるのではないかと感じました。一方その窓口としての体制整備が急務である。大会期間中にインターネットで確認したボランティア参加の登録窓口にはどのような役割があって、どんな資格が必要か様々な FQA が用意されていた。

(ウ) ホテル、食事

今回 ITO に用意されたホテルは SARASOTA 市内のこじんまりとしたホテルであり、会場へは車で 30 分といったところである。驚いたことに送迎用のバスはなく、15 人乗りのワゴン車が 2 台用意され、ITO の誰かが運転をする。国際免許証の保有が必要なのか、州政府ごとに違うようだが、日米間ではこれといった取り決めが無いようで州政府の判断によって異なるらしいので私は運転を見合わせた。レース後は大きなショッピングモールに買い物に行くチームやビーチへ海水



図-8 艇計量所(コンクリートベースが打設されている)



図-9 パラ用棧橋



図-10 宿泊したホテル(右側 4F 建ての建物)

浴に出かけるなどオフタイムの足として活躍した。

食事は朝晩は基本はホテル、昼食はレース会場であったが、NTO とのディナー（と言っても海沿いのバーでの立ち飲み）や Jury Outgoing、そして Nation's Dinner など様々なアメリカンスタイルを楽しむことができた。ただ、滞在中にラスベガスでの銃乱射事件が発生し、それまではハリケーン一色だったテレビ報道が一転して銃乱射事件になり、銃社会の現実を身近に感じる滞在だった。

4. 開催種目について

今回の開催種目は、下記のとおり。

Men (M): 1x, 2x, 2-, 2+, 4x, 4-, 8+

Women (W): 1x, 2x, 2-, 4x, 4-, 8+

Lightweight Men (LM): 1x, 2x, 2-, 4x, 4-

Lightweight Women (LW): 1x, 2x, 4x

Para-rowing: ASW1x = PR1 W1x, ASM1x = PR1 M1x, TAMix2x = PR2 Mix2x, LTAMix2x = PR3 Mix2x, LTAMix4+ = PR3 Mix4+

5. 審判業務について

参加審判リストを以下に添付する。18 か国から集まった審判員 18 名と審判長 Patrick Rombaut(FISA)の 19 名。なお、FISA Umpiring Commission メンバーは Fabio BOLCIC(ITA), Gabrielle ISENSCHMID WEBER(SUI), Kris GRUDT(USA), Nick HUNTER(AUS)の 4 名であった。

FAMILY NAME	GIVEN NAME	CCD	L No.
AGUIRREGOMEZCORTA	Victoria	ARG	1423
WALTER	Victor	AUS	1226
CAMPBELL	Ken	CAN	1184
MARINOVIC	Mladen	CRO	1148
CASTRO GOMEZ	Miguel	CUB	1137
COPIE	Marie-Laurence	FRA	1481
SIEGLER	Holger	GER	1045
SIU	Kin Wah	HKG	1228
KERR	Kieran	IRL	1213
MOSCHELLA	Nicola	ITA	1487
TABATA	Yoshiniko	JPN	1265
MEJERS	Freek	NED	1543
KUCZMA	Monika	POL	1545
SEQUEIRA-BYRON	Patrick	SUI	1573
HAMMAMI	Aymen	TUN	1642
DERMAN	Etem	TUR	1419
WILLENBRING	Robert	USA	1438
HANSEN	Morten Juel	DEN	1561

残念ながら今回の審判員の集合写真は現在のところメール等によって送られては来ていない。

以下に、それぞれのポジションでの特記事項を記す。

(ア) 発艇

今回の発艇システムはドイツ IMAS 社製のものであり、記録は SWISS TIMING 社であった。IMAS のブーツ形状は V 型ではなく U 型のため、ポートホルダーが慣れるまではしっかり押し付けないと艇首に 1cm 程度のばらつきが目立った。



図-11 審判員の一部とホテルのバーで



図-12 北京オリンピック審判メンバー(2名は今大会のNTO)

大会前々日の午前の Dress Rehearsal までに会場に到着したのは ARG の Victoria、HKG の Dr.Siu と私の3人だけだったため、この3人で発艇・線審を担当し、おかげで多くの発艇経験を積むことができた。

今回の大会では Spare Race が 41 クルー参加のため FISA Qualification Rule 改定に伴う Time Trial が行われた。30 秒ごとに 2 クルーを呼び込み、発艇させるため発艇・線審の連携が重要である。事前に監督主将会議で手順は説明があったようだが、審判には詳細版資料が配布され、秒単位での手順が確認された。詳細は省略するが、線審部背面のブリッジにはマーシャルが配置され、ここでの呼び込みがレース進行をスムーズに進める肝である。



図-13 IMAS 社製スタートシステム



図-14 線審前をスタート地点へ向かう日本 LW4X クルー

(イ) 線審

ポートホルダーはボランティア参加の地元高校生、大学生であった、全述の通りスタートフィンガーの操作性は良く、短時間で揃えることが可能。

IMAS のシステムは発艇時のブーツからの振動が原因か、時折静止画像のタイミングが発艇員のスイッチのタイミングと微妙にずれることがあった。

アライナーには専用のモニターが用意され、そこには各レーンの拡大画像が映し出される。アライナーはこの画像を元に各レーンのポートホルダーに指示を与えていた。

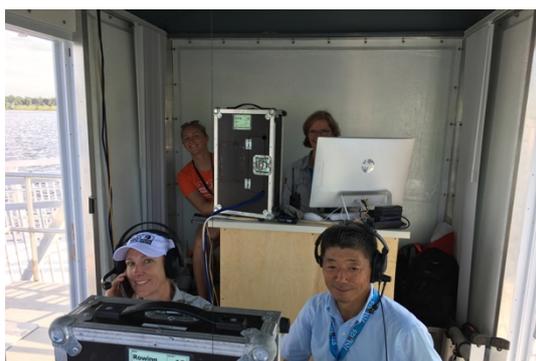


図-15 アライナーは後部に位置する



図-16 アライナー専用スクリーン、各レーンの拡大画像

(ウ) 判定

判定塔3Fの判定席は空調完備、見晴らし良好な最高のポジションである。ITO は2名が配置され交代で Responsible を務め、Result Sheet にサインする。NTO はブザー、判定、各艇の GPS データの入力などを担当、5人が配置されていた。中間計時データはスリットカメラのデ



図-17 判定所

ータを判定塔で SWISS TIMING が取得しラップタイムを入力する。

(工) 主審

大会最初の Jury Meeting で参加 ITO 全員に審判旗セットがプレゼントされた。細いガスパイプ？を繋ぎ合わせたものを旗竿にし、三枚の布をそこに取り付けるものであり、各人がこれをいつも持参し主審に指名された時使用しなさいということで、主審艇には旗は用意されていなかった。ポジションは最終日を除き当日の朝知らされたので最初のうちはホテルに忘れて借りる者が続出した。



図-18 主審用旗、パイプは2本を繋ぎあわせる

判定にいた際、中国 PR1WX での relegate があつた。全艇決勝線通過後主審が赤旗をあげたのだ。理由は選手の上体をバックシートに固定するベルトが不適切であったとのこと。水上でよくそこまで確認したなと思ひ、後でレースの主審に尋ねると、レース中に何度か停止し、その際に緩めたり締めたりしていたとのこと。それならわかると納得した。

今回は Zonal と Dynamic を併用した。レース間隔が Final A 以外は 5 分と短く、基本は Zonal、Final A とパラは Dynamic である。Zonal はとにかくコースに直角に出て直角に戻る、ループを描かない主審艇の動きが Patrick から再三求められた。

(オ) 監視

本年度は FISA Rule の大幅な改定があり、日本国内の FISA Umpire はインターネットを使った On-Line Clinic または大会参加時のセミナーを受講している。この受講が来年度の FISA 大会エントリーの必須条件となる。私は事前に On-Line Clinic により変更点は理解していたつもりだが、念のため大会期間中のセミナーにも参加した。昨年のロッテルダムでの世界選手権中でのセミナーは受講済みだが、4 年に一回の受講機会の延長もある。特に監視部署でのアドバタイジングルールには習熟が必要だが、昨年からの大きな変更点があるためセミナーで再確認ができた。

① ユニフォーム

大きな変更点は帽子などヘッドギアと靴下に個人のスポンサーが付くことを想定し、クルー内で同じ形、同じ色、同じ位置であればスポンサーロゴは問わないというもの。例えばダブルスカルであればパウがアディダス、ストロークがナイキでも OK ということ。ユニフォーム等の機能性を表すロゴも認められた。また、コンプレッションソックスのロゴもサイズに制限はあるものの同様である。昨年の世界選手権等でオーバーサイズのものが見られたが、今年は確実に NG とされた。



図-19 コンプレッションソックス、アドバタイジングは NG

② ポート

今回からシューズ、クイックリリース用のストラップにも制限があるが、特にシューズメーカーはことごとくサイズオーバーであり、監視でその点を FISA Umpiring Commission メンバーに相談すると監督主将会議で今大会はメーカーが対応できていないため不問となった。また、ウォッシュボード内にポートメーカー名がある物も散見されたがこちらはガムテープでマスクした。

安全面でのチェックはパウボール、靴のチェックである。ヒールロープの長さ制限 7cm は撤廃され、靴を持ち上げて水平以上に高く持ち上がるものは不可である。国内ルールも運用が変更されたようであるが、どのくらい、どのような状態が適切であるか定量的な表現が必要と感じる。

パラローイングの対応は FISA Classifier と協働するのだが、例えば PR1X のボンツーンの高さチェック、胸のベルトの位置など最終的には我々 ITO が責任を負うこととなる。いくつかのボートのボンツーンは高さを下げる事となった。またシートバックにもボートメーカーのロゴがあったが、Final A では表彰式でのカメラを意識し、事前にガムテープでマスキング



図-20 シューズのアドバタイズメント

するなどの対応をした。



図-21 キャンパス内のアドバタイズメント、ガムテープ貼り

③ スペイン・カタルーニア州旗

バウボールから 50cm 以内は、ボートメーカーのロゴと船名以外は許可されていない。大会初日、スペインクルーのトップに黄色とオレンジの縞模様のシールが貼られていた。現在も政府と州政府の間で独立が問題となっているスペイン・カタルーニャ州の州旗である。今でこそテレビ等で報道されるところであるが大会期間中は全く知らず、FISA Umpiring Commission メンバーに相談するとセンシティブな問題だとして、その際はそのまま出艇させた。その後クルーと協議しシールを剥がすこととなった。

(カ) Admiral

大会終盤 Final A のラウンドで Admiral が回ってきた。3位までのクルーに順位を知らせ、表彰台へ行くよう促す役目である。Patrick に「マーシャルみたいなものですね。」と言ったところ「いや、アドミラルだ！」と明確に否定された。国際大会での Admiral は初めてであったが響きは良い。日本語で直訳すると「提督？」。この部署は非常に楽しめた。ゴール後、着順のわからないクルーに入賞を告げると歓喜の雄叫び、またスマホで調べて母国語で「おめでとう」と告げると満面の笑みで答えてくれた。特に今大会のベストレースとも言える M2-で優勝した ITA のイケメン2名、間近でメダルを首にしたベストショットが撮れた。

6. その他

(ア) 日本選手団

今回の日本選手団は LM4X、LW4X、LM2X、LW2X、M1X の5クルーであった。戦績は既報であるが、LM4X、LW4X は見事 Final A 進出を果たした。大会終了後選手団と懇談する機会があり、ボートのサイドに許されたアドバタイジングルールについて説明した。4X なら両サイドに4



図-22 PR1 ボンツーン、ベルトのチェック



図-23 スペイン、カタルーニャ州の州旗



図-24 今大会ベストレースの呼び声高い ITA/M2-

種類ずつ計8種類の広告ができる。これは各選手に許されたエリアであり、権利である。多くの日本選手は企業に所属し大会参加をしている。世界選手権で Final A 進出となれば日本国内ではマスコミはあまり取り扱ってくれないが、欧米では衛星生中継されるなど露出度は高い。企業から支援を受け参加しているのであれば、各選手が自分の企業のステッカーを貼るなどして支援に応えてはいかがだろうか。ルールに縛られるだけでなくルールをうまく利用することが自己のステイタス向上にもつながる。

(イ) US\$20,000 の Private Luxury Suites

決勝線対岸のエリアはレース観戦には絶好の位置であるが、ここに配置されていたのが企業向けのラグジュアリー・スイートと言って、モーターのドライバーから聞いたところ1週間で US\$20,000 のコテージらしい。空調完備の室内では食べ物や飲み物が振る舞われレースを観戦することができる。そのスタート寄りにはオープンな観覧席もあるのだが、ここも入場料、飲み物などが振る舞われている。ただしここは飲み物等は有料？、そのためか、その背後に臨時の ATM が設置されていた。



図-25 Private Luxury Suites

(ウ) レース後のクールベスト

大会期間中は 9-10 月と云えどフロリダ、連日 30 度を超える猛暑であった。監視で注意して見ていると CAN、GBR、NED などボート大国といわれる国々では出艇、帰艇桟橋で選手がベストを脱いだり着たりを繰り返していた。GBR はゴール背後にある救護桟橋でこのベストを手渡すこともあった。CAN のコーチにベストを見せてもらおうと裏面に保冷剤がびっしりと貼り付けられたものであった。強い国は暑さ対策としてこのような支援体制も充実していると実感させられた。



図-26 CAN のクールベスト内部

(エ) FISA CONGRESS

大会終了翌日、FISA CONGRESS に参加させていただく機会を得た。すでに日本ボート協会ホームページで FISA Circular が公開されているのでご存知かと思うが、主な内容を以下に記す。

- 加盟国:これまで 151 であった FISA 加盟国、地域は新たにカンボジアとギニアが承認され 153 カ国、地域となった。
- 2020 世界選手権:2020 オリンピックイヤーの世界選手権開催国は投票の結果、Poznan(POL) 57 vs 94 Bled(SLO)で Bled に決定。
- 2021 世界選手権:2021 世界選手権は立候補国は中国・上海以外になくここに決定。
- 2019 世界沿岸選手権 :2019 世界沿岸選手権はアジア初の HKG 開催となる。なお、来年の開催地は未決定であり 11 月 30 日を立候補の締切日とする。

特に FISA 加盟国が 153 に増えた件は、シンガポールで 10 月中旬開催された FISA 審判員試験を受験する山崎佳奈子さん(東京)、市川愛さん(滋賀)にメールで即刻伝えた。既報の通り、もちろんお二人とも見事に合格であった。

(オ) 2018 World Masters Rowing

来年、2018の世界マスターズはここ、SARASOTAで開催されます。日本(成田)から飛行機を乗り継いで15時間強は決して近いとは言えませんが、ボランティアを含め運営面は問題なさそうです。今回私はチャンスがありませんでしたが、観光でマイアミやジャマイカ、キューバへ足を延ばすなどオススメです。ジャマイカへは Tampa 空港より1時間半程度とのことです。

(カ) EV?FCV?

これも前回報告と同様ミライのクルマについての動向調査です。昨年のロツテルダムではBMWがオフィシャルサプライヤーとしてi3を提供していた。今回はオフィシャルサプライヤーではなかったが、会場内のブースにはテスラ社のModelXが展示されていた。車社会の米国でもこのクルマの人気は高くSARASOTA市内を走っているところを見ることがあった。2020TOKYOはEVなのかFCVなのか、某自動車会社の動向も気になることです。



図-27 会場内のテスラ社ブース

(キ) 本大会を振り返って

昨年のロツテルダム、本年のSARASOTAと2年続けて世界選手権に参加させていただいた。どちらの大会でもNTOの働きは秀逸であり、スムーズな大会運営を可能としていた。彼らはいずれもFISA Ruleを熟知しており、かつ語学力が堪能である。加えてボランティアの高校生、大学生も英語が母国語もしくは相当レベルの語学力を有している。今回の国際審判員試験で日本は新たに女性2名を加え世界第4位の国際審判員18名を有する国となったとはいえ東京オリ・パラ開催期間は長い。この長期間に亘りNTO、ボランティアを組織し、成功裡に大会を運営するためには何が必要か、考えている時間はあまりない。私もこれまでに多くの国際大会に派遣していただいた。その経験を活かし、できることは協力していきたい。 以上



図-28 開会式の水上演習、これぞアメリカ的な



図-29 開会式のチアリーダーたち、同左



図-30 大会終了後のテラスでの寛ぎ



図-31 Result Sheetとサイン